

平成21年6月28日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17500553
 研究課題名（和文） 幼児期後半から学童期における箸使用の発達に対応した食育プログラムの開発
 研究課題名（英文） Development of Food Program according to Eating Behavior with Chopsticks from Preschoolers into School-age Children
 研究代表者
 酒井 治子（SAKAI HARUKO）
 東京家政学院大学家政学部 准教授
 研究者番号：30300122

研究成果の概要：

本研究により、箸使用に着目し、子どもの健やかな発達を目指した栄養学の観点に加えて、日本の食文化を反映した箸を鍵に、幼児期は箸を使い始めの3歳（年小）、練習期5歳（年長）、熟達期8歳（小学2年）の発達変化を、保育所と、学童保育所での食事場面をVTRにより観察し、解明することができた。さらに、家庭用・教育者用のパンフレット教材を核とした食育プログラムとその評価システムを提案することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,500,000	0	1,500,000
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,400,000	390,000	3,790,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学 食生活学

キーワード：

(1) 食行動	(2) 幼児	(3) 食育
(4) 箸	(5) 評価	(6) 発達

1. 研究開始当初の背景

近年、子育て支援、生活習慣病予防、食文化の伝承等の観点から、乳幼児期から学童期を通じた『食育（子ども食べる力を育む取り

組み)』が重視されてきている。しかし、実際には乳幼児期と学童期とは連続した食育のプログラムとしては実践されているわけではない。幼児期での幼稚園と保育所、学童

期の学校が連携して、子どもの発達の連続性に配慮したプログラムが求められている。

子どもの食をめぐるのは、栄養素等摂取の偏りと共に、「箸を正しく持てない」「上手に使えない」等の食具使用の乱れが警告されている。従来、食具使用に関する研究は、幼児では認知発達、高齢者ではリハビリテーション等の分野で進められてきたが、行動分析に留まっており、食行動の発達過程を解明し、その応用である食教育（食育）に着手した研究は国内外ともに殆どみられない。著者はこれまでVTR観察法を構築し、幼児期の箸使用行動の発達過程の解明を手掛けてきたが、それを発展させ、幼児期から学童期にかけての箸の使用行動の発達プロセスの解明していくことが必要であった。

こうした背景を踏まえて、本研究では箸使用に着目し、子どもの健やかな発育を目指した栄養学の観点に加えて、日本の食文化を反映した箸を鍵に、子どもと家庭の多様なライフスタイルに対応した子育て支援の観点から、食育プログラムとその評価システムを提案しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、申請者は幼児期後半から学童期にかけての箸使用行動の発達過程を明らかにし、それに対応した食育プログラムと評価方法を提案するものである。

第1に、平成16年度の質的な観察データを基に、質問紙調査で量的な把握をし、箸使用行動の発達の評価方法を提案する。同時に、保育士・保護者などによる支援方法の実態も把握する。

第2に、幼児期は箸を使い始めの3歳（年少）、練習期5歳（年長）、熟達期8歳（小学2年）の縦断的・横断的な発達変化をVTRによる観察法により解明する。

第3に、使用に着目した教材パンフレット

の試案作成とその妥当性を検討する。

第4に、以上を基に、家庭用・教育者用のパンフレット教材を核としたプログラムを開発し、その評価方法について検討を行い、幼児期後半から学童期にかけて箸使用に着目した食育プログラムを開発していくこととする。

3. 研究の方法

1) 家庭での箸に関する食育に実践状況と、保育所での食育に関するニーズに関する質問紙調査（平成17年度）

家庭での箸使用状況と、保護者の箸使用に関する家庭での支援方法を探ることを目的とした。そのために、2005年11月S市の保育所に在園する0～6歳児1429名の保護者を対象に、箸の使用状況、及び家庭での箸に関する食育に実践状況、さらに保育所での食育に関するニーズについて質問紙を設計し、データの解析を行った。1003名の回収が得られたが、有効回答は年齢未記入を除いた976名であった。

2) VTR観察法を用いた幼児期は箸を使い始めの3歳児、練習期5歳児、熟達期にある8歳児の横断的な発達過程の解明（平成18年度）

箸を使い始める幼児の家庭での食事場面の事例研究を踏まえ、幼児期は箸を使い始めの3歳（年少）、練習期5歳（年長）各6名ずつは保育室にて、熟達期にある8歳（小学2年）6名は学童保育所にて計18名の横断的な発達変化を観察法により明らかにした。観察方法は、平成17年9月の2週目（3日間）、年少・年長の保育室、学童保育所にて、各クラス2台のVTR計4台で観察を実施した。観察者が子どもの行動パターンを観察するためのチェックリストを用いて観察する方法を用いた。分析は、行動分析用デジタルビデオソフト「食

物に触れてから、口に入れた後の操作までのプロセス」のどの段階で、どのような操作をしているか、対象者毎に、申請者が構築してきた観察行動と分類カテゴリーによる観察項目と対象とした料理を記録した。さらに、「1口で口に入れる行動」を1行動と捉え、総行動数に対する各行動の出現率を比較した。

3) 教材パンフレットの試案作成とその妥当性の検討 (平成 19 年度)

1)2)の結果を基に、「幼児期後半から学童期の箸への使用行動の発達を把握できる10項目のチェックリスト」を作成し、東京都多摩地区の小学1校(2年生90名)と、保育園3園(3・5歳45名)計90名、3学童保育所の在在する2年生各30名計90名を対象に、パンフレットを用いて子どもの箸の使用行動の評価ができるか否か、保護者と教育者の双方から食育内容へのニーズを量的に明らかにした。同一児の箸の使用行動を教育者と保護者とで比較し、その共通点と相違点を明らかにし、チェックリストの有効性を検討した。

4) 家庭用・教育者用のパンフレット教材を核としたプログラムの開発と、その評価方法の検討 (平成 20 年度)

平成 20 年 4 月に、9 年度の対象園・校とは別の多摩地区の 4 保育所 (3 ~ 5 歳)、2 学童保育所 (7・8 歳) を対象に、保護者会にパンフレット教材を配布するとともに、ベースライン調査を実施した。実際の給食場面では、教育者が直接、子どもの箸の使用行動の発達を促す環境作りを試み、平成 20 年 12 月に、養育者と保育士・学童指導員による食育のプロセス評価 (保護者や教育者の知識・態度の変化や環境づくりなど)、影響評価 (子どもの箸の使用行動の発達の变化、食への関心・興味などの態度) を実施した。

4. 研究成果

(1) 家庭での箸に関する食育に実践状況と、保育所での食育に関するニーズに関する質問紙調査 (平成 17 年度)

①箸の使用開始は2~3歳5か月にまたがり、個人差が大きかった。また、箸の使用は1歳で13.7%、2歳で約50%、3歳で80%に達していた。②箸使用に関する保護者の悩みは「教え方がわからない」が31.5%で最も多かった。③箸の使用に関する会話は2歳頃の箸の持ち始めの時期、5~6歳ぐらいの箸の習熟期の2時期に多く見られた。④箸選びや教え方に関する情報源がないと考えている保護者が41.2%みられた。⑤箸使用に関する食育は、家庭で担うべきであるという認識が強い一方で、保育園から箸の選び方教え方について情報が欲しい、また、保育園での指導状況についてもっと知りたいというニーズが多くみられた。以上の結果から、保護者は箸の使用について家庭で指導することという認識を持っているものの、その情報源が少ないと認識しており、保育所を拠点とし、メディアや保健所・保健センターなど、地域全体での取り組みも期待されていることが明らかになった。

2) VTR 観察法を用いた幼児期は箸を使い始めの3歳児、練習期5歳児、熟達期にある8歳児の横断的な発達過程の解明 (平成 18 年度)

①個人差はあるものの、3歳から5歳にかけては著しく箸の使用行動は発達するが、学童期の8歳では5歳児との箸の持ち方や使い方などにおいて著しく発達しているとはいえない実態が明らかになった。②3~5歳児にかけての箸の持ち方の発達の程度に比べて、5~8歳にかけては箸の持ち方の変化は少なかった。また、箸を

もたない手での補助については、箸で食物をはさむ段階での補助は少なくなっていくものの、器をもつ操作は多くなっていないかった。8歳になっても正しい持ち方をしていない児が6名中3名みられた。

3) 教材パンフレットの試案作成とその妥当性の検討 (平成 19 年度)

①今年度は、昨年度までの VTR による、箸を使い始めの3歳(年小)、練習期5歳(年長)、熟達期8歳(小学2年)の横断的な発達変化の観察を踏まえて、幼児期後半から学童期までの箸の使用行動の観察項目を、親や子ども自身が確認できる行動発達項目として抽出することができた。②親の情報入手状況や保育所や学校などの地域での社会資源の活用度を含めたチェックリストを含んだパンフレット教材を試作することができた。

4) 家庭用・教育者用のパンフレット教材を核としたプログラムの開発と、その評価方法の検討 (平成 20 年度)

①パンフレット教材を、4保育所(3～5歳)、2学童保育所(6・7歳)に配布し、ベースライン調査とともに、情報の提供を行うことができた。②15分程度の箸使用に関する指導の時間を設けると共に、日頃からの指導について統一的な内容を実施することができた。③その6か月後に再配布し、教材の有効性について、保護者と指導員の両方に質問紙調査にて、プロセス評価を行った結果、幼児・児童の食行動の発達をとらえるための知識・態度・スキルの習得、また、地域資源の積極的活用についての効果を検証することができた。しかしながら、結果評価として、子どもが器をもつようになっていたが、箸の持ち方の変化には至らなかったケースが多かった。8歳児では自分で箸を持ち直す行動がみられるようになってきていると回答した保護

者・指導員がみられた。パンフレット教材自体の評価として、子どもの箸使用の発達過程を把握する上でとても有効だったと評価する保護者が73%みられた。

これらの結果から、乳幼児から学童期にかけての発達の連続性を考慮し、箸使用に関する食育プログラムを開発し、その有効性に関して検証することができた。今後、特に学童期については事例を増やし、検証を重ねるとともに、学童期の後半での発達の变化についても解明していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計(22)件

1. 酒井治子：改定「保育所保育指針」の解説—子育て支援の観点からの食育—, 日本栄養士会雑誌, 査読 無, 51(2), 2008, 20-31
2. 酒井治子：改定「保育所保育指針」の解説—食を通した子どもの育ち—, こどもの栄養, 査読 無, 10(2), 2008, 2-9
3. 酒井治子：改定「保育所保育指針」の概要と食育の進め方, 食生活, 査読 無, 103, 2008, 2-13
4. 酒井治子：気になるこれからの乳幼児・保護者の食育—乳幼児栄養調査等から—, 食生活, 査読 無, 101(4), 2007, 89-95
5. 酒井治子：保育所における食育の計画づくりの状況と課題, こどもの栄養, 査読 無, 620, 2007, 2-8
6. 酒井治子：子どもの食をめぐる現状と食を通した子育て・子育て支援, 小児看護, 査読 無, 30(7), 2007, 874-879
7. 酒井治子：食を通した子どもの健全育成(食育)における子育て・子育て支援の視点の重要性, 小児科, 査読 無, 48(8), 2007, 1203-1211
8. 酒井治子：保育所での食育の現状と、そ

- れを支える行政管理栄養士, 公衆衛生情報, 査読 無, 37(9), 2007, 32-34
9. 酒井治子: これからの管理栄養士 第II部 管理栄養士の専門性と活躍の場「食育一食を通して子どもの育ちを支える」, からだの科学, 査読 無, 増刊, 2007, 62-67
10. 酒井治子: 気になる、これからの乳幼児・保護者の食育～乳幼児栄養調査結果から, 食生活, 査読 無, 101(4), 2007, 89-95
11. 酒井治子: 食を通じて、子育て・子育てを応援するー地域拠点としての保育所の役割ー, 食育活動, 査読 無, 225, 2006, 38～43
12. 酒井治子: 公衆栄養 地域における食育(1)食を通して“子どもと親の育ち”を支える地域での食育ネットワーク, 臨床栄養, 査読 無, 108(2), 2006, 128
13. 酒井治子, 東京都多摩立川保健所: 公衆栄養活動 地域における食育(2)おいしく食べて元気で長生きしてもらい隊運動の展開, 臨床栄養, 査読 無, 108(4), 2006, 108
14. 畠山佳代子, 酒井治子: 公衆栄養活動 地域における食育(3)「私たち楽しく食べる子どもを増やし隊」の地域食育ネットワーク活動, 臨床栄養, 査読 無, 108(6), 2006, 6
15. 田村直, 酒井治子: 公衆栄養活動 地域における食育(4)縦割りの食行政を横つながりへー新潟県三条市の取り組みから, 臨床栄養, 査読 無, 109(2), 2006, 144
16. 酒井治子: 公衆栄養活動 地域における食育(6)住民と専門職とが一体となって食育のニーズアセスメントから計画へ, 臨床栄養, 査読 無, 109(7), 2006, 836
17. 酒井治子: 食と福祉を考える, 月刊福祉, 査読 無, 89(2), 2006, 18-25
18. 酒井治子: 食、からだ、こころ～食育とは何か～, 月刊福祉, 査読 無, 88(12), 2005, 68-75
19. 酒井治子: 小学校入学前までに培っておきたい「子どもの食を営む力」, 栄養教諭, 査読 無, 2, 2005, 84-89
20. 酒井治子: 食育ー子どもが生活文化を創造する, 児童福祉文化年報(平成16年度版), 査読 無, 2005, 1-4
21. 酒井治子: 食の健康 - 2. 保育所における給食と食育, 小児科臨床, 査読 無, 58(4), 2005, 115-121
22. 酒井治子: 食育ー楽しく食べられる環境づくり, 保育の友, 査読 無, 53(2), 2005
- [学会発表] 計(12)件
- Haruko Sakai, Shiho Hirose, Tokie Anme and Youichi Sakakibara The Relations between the Child Care and Education relating to Food, Home Environment, and the Quality of Life of Parents, 15th International Congress Dietetics, 2008.9, Yokohama.
- Shiho Hirose and Haruko Sakai: The Role of Dietitian on the Food Program in Child Care and Education, in Nursery Schools in Japan, 15th International Congress Dietetics, 2008.9, Yokohama.
- Ritsuko Kato, Haruko Sakai and Mami Yoshida: Examination via group interview regarding child care and educational needs related to nutrition, 15th International Congress Dietetics, 2008.9, Yokohama.
- 酒井治子, 廣瀬志保, 師岡章, 金田利子: 保育所における食育のあり方を考える, 第17回日本乳幼児教育学会, 平成19年8月, 東京
- 酒井治子, 中坪史典, 堤ちはる, 廣瀬志保, 森眞理, 師岡章: 保育所における食育の計画づ

くりの実態, 第 17 回日本乳幼児教育学会 (東京), 平成 19 年 8 月, 東京

酒井治子, 堤ちはる, 師岡章, 清野富久江: 保育所における食育の計画づくりに関する全国的な動向, 第 54 回日本栄養改善学会学術総会, 平成 19 年 9 月, 長崎

酒井治子, 堤ちはる, 師岡章, 清野富久江: 保育所における食育の計画づくりに関する全国的な動向, 第 54 回日本栄養改善学会学術総会, 平成 19 年 9 月, 長崎

師岡章, 酒井治子: 保育所における食育プログラムの開発と評価—第 1 報—モデル園での食育プログラムの内容構成の特徴と課題, 第 54 回日本栄養改善学会学術総会, 平成 19 年 9 月, 長崎

清水詳子, 廣瀬志保, 師岡章, 酒井治子: 保育所における食育プログラムの開発と評価—第 2 報—そのプロセスと雑誌連載やホームページ運用による効果, 第 54 回日本栄養改善学会学術総会, 平成 19 年 9 月, 長崎

廣瀬志保, 師岡章, 酒井治子: 保育所における食育プログラムの開発と評価—第 3 報—保護者の食知識・食態度と子どもの食事行動の変化, 第 54 回日本栄養改善学会学術総会, 平成 19 年 9 月, 長崎

堀端薫, 酒井治子: 保育所における子どもの調理体験活動の実態について, 第 54 回日本栄養改善学会学術総会, 平成 19 年 9 月, 長崎

上田成子, 堀端薫, 酒井治子, 桑原祥浩: 保育園厨房で調理された食材・調理食品の衛生細菌学的研究, 第 66 回日本公衆衛生学会総会, 平成 19 年 10 月, 愛媛

[図 書] 計 (6) 件

酒井治子: 保育所における食育の計画づくりガイド, 保育所における食育計画研究会編集責任者, 財団法人 児童育成協会, 2008,

220

酒井治子: 幼稚園・保育所の経営課題とその解決, 幼稚園・保育所の経営課題実務研究会編, 第一法規, 2008, 250

酒井治子: 子どもの食育 第 1 章 子どもたちの食と健康は今—7 食を通した子育ての環境と子育て支援—, 食生活編集部編, カザン, 2007, 205

酒井治子: 公衆栄養学実習 第 2 章 地域・社会集団の栄養・食生活及び健康状況の実態把握と課題分析, 二見大介編 分担執筆, 同文書院, 2007, 総ページ数 187, 44-56

酒井治子: 栄養・食糧学データハンドブック 第 1 3 章 6 学習者の特性別栄養教育・栄養指導, (社) 日本栄養・食糧学会 監修, 同文書院, 2006, 385-386

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 治子

研究者番号: 3 0 3 0 0 1 2 2

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者